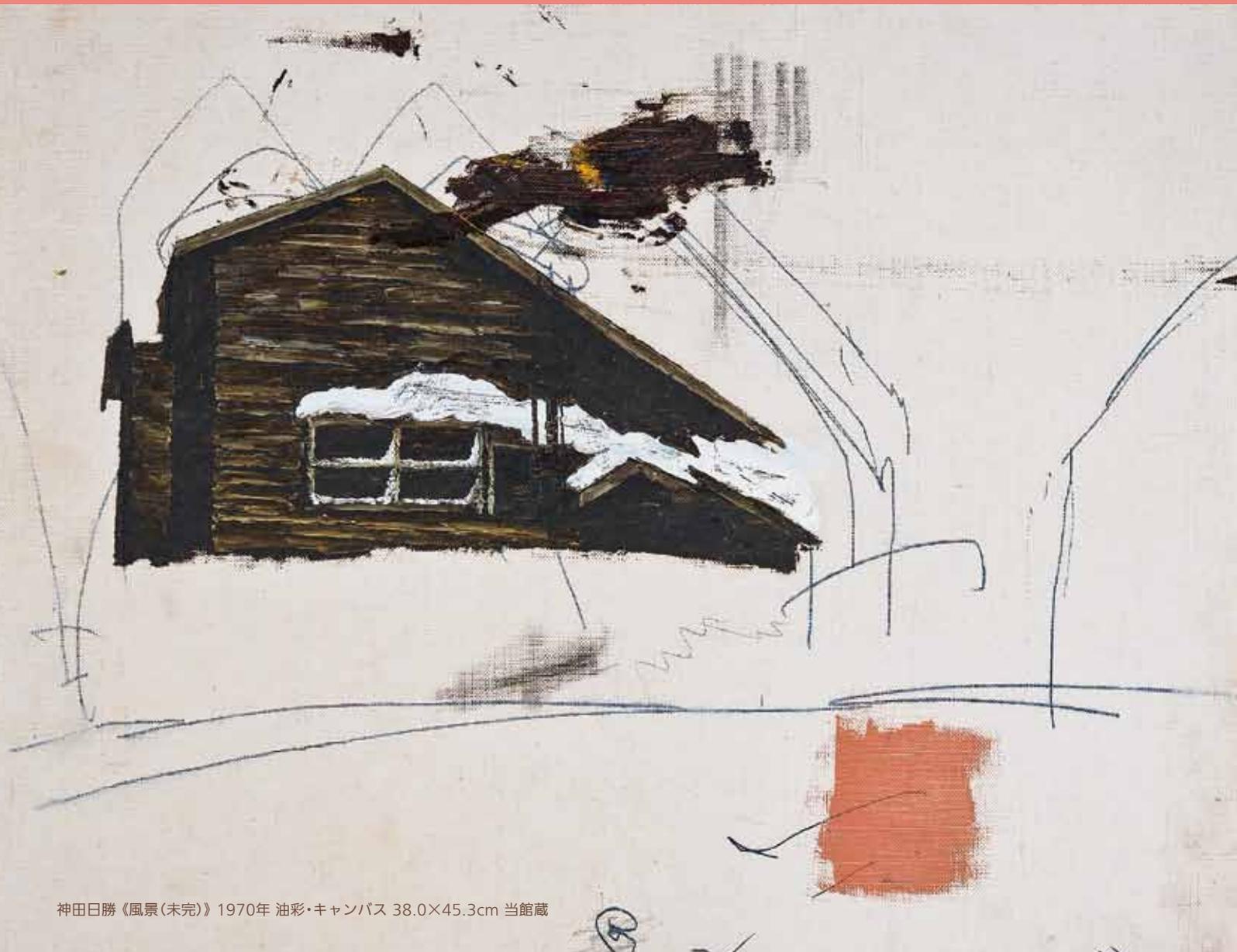




# KANDA NISSHO MEMORIAL MUSEUM of ART

NO.37

神田日勝記念美術館だより



神田日勝《風景(未完)》1970年 油彩・キャンバス 38.0×45.3cm 当館蔵



神田日勝記念美術館館長

## 小林 潤

『なつぞら』に始まり、『なつぞら』に終わった令和元年度であった。この一年、全国各地から4万人を超えるお客様をお迎えし、日勝作品を鑑賞いただいた。現況から、必然的に今号の紙面の多くをなつぞら関係に割くこととなった。

感想ノートを書いても、『なつぞら』で知り、インターネット等で作品を見、そのイメージで当館を訪れたが、実物の迫力に驚いた。」などが多く綴られており、その効果は絶大である。

さて、毎年恒例の6月の開館記念イベント「蕪壱祭」は、十勝で活躍するアンサンブルを招聘し、お客様は美術館展示室の席を埋め尽くした。

8月の日勝を偲ぶ「馬耕忌」は圧巻であった。プレミアムトークショーと銘打ち、『なつぞら』の脚本を手掛けた大森寿美男氏、神田日勝をモデルとした山田天陽役の吉沢亮氏、NHK統括プロデューサーの磯智明氏の出演をいただき、当

## 一年を振り返って

選倍率6倍の難関を通過した600名の皆さんと日勝を偲び、『なつぞら』の世界に思いを馳せたが、トークが進むにつれドラマの世界と現実を行き来する観客相互の心模様が伝わりあうような、至福の時間が流れた。

12月の生誕祭「日勝祭」では、元NHK帯広放送局長山本健一氏をお招きして美術館運営に示唆に富んだお話をいただいた。

没後50年プレ企画「しずくの中の神田日勝」、「飛び出す！半身の馬」とも例年の5倍近い来場者数を記録し、好評を博した。

今年も総じて日勝ファン・友の会皆さんに支えられながらの一年であったことを振り返り、感謝の念に堪えない。

今後も地道な調査研究の成果を展覧会等においてお披露目しつつ、没後50年となる新年度を節目として、皆さんと着実な歩みを進める所存であり変わらぬご指導を切に願っている。



NHK帯広放送局 局長

## 高木 剛

2019年4月1日（月）、連続テレビ小説100作目となる『なつぞら』の放送がスタートしました。

北海道・十勝が舞台となったこのドラマは、戦後、北海道の大自然、そして日本アニメの創成期を舞台に、まっすぐに生きたヒロイン「なつ」の夢と冒険、愛と感動のドラマです。

私が帯広放送局に着任したのは2018年6月で、着任早々に十勝ロケが行われました。ロケはヒロインの広瀬すずさんをはじめ、草刈正雄さん、吉沢亮さんなど豪華出演者たちと、地元のエキストラ延べ50人の方々、延べ80頭の牛、延べ15頭の馬で行われたことを、つい昨日の事のように覚えています。

ドラマではヒロイン「なつ」が、十勝で育まれた豊かな想像力と開拓者精神を生かしてアニメーションの世界にチャレンジして行きますが、このチャレンジ精神は十勝の大自然と強くて優しい開拓者精神そのものを描いています。そして、「なつ」の人生に大きな影響を与えた吉沢亮さん演じる「山田天陽」は、ドラマに欠かせない存在であったと思います。「山田天陽」は神田日勝さんをモチーフにしており、大きなベニヤ板に馬の絵を描くシーンや、畑を耕しながら十勝を愛

## 『なつぞら』の放送で

する姿など、まさに本人そのものように思えました。そして、ドラマで山田天陽が亡くなった時には「天陽くんロス」として新聞やネットニュースなどで大きく取り上げられたほか、ロケセットのアトリエには献花台が設けられるなどたくさんのファンが別れを惜しむ現象が起きました。また、昨年の馬耕忌には、吉沢亮さんと脚本家の大森寿美男さんがゲストに招かれ、神田日勝さんを偲びました。

『なつぞら』は、ここ十勝でドラマの世界と実在の世界をつなぐハブとしての役割を果たし、神田日勝さんの作品のすばらしさを再認識する機会になったのではないかと思います。今年には神田日勝さんの没後50年を記念した回顧展が、東京、神田日勝記念美術館、札幌で開催されると伺いました。日勝さんの力強くかつ精緻に表現された肉筆を目の当たりにすることで、多くの方がその画力に圧倒されることでしょう。（私のように！）

末筆ながら『なつぞら』制作にあたり、関係者の皆様に多大なご協力を賜りました。この場をお借りしてお礼申し上げますとともに、神田日勝記念美術館の益々のご発展をお祈り申し上げます。



# アーティストとのコラボ

2019年度は、2020年の神田日勝没後50年へ向  
現在活躍する北海道のアーティストとのコラボ

## 神田日勝×浅井美紀しずく写真 「しずくの中の神田日勝」

会期:2019年6月26日(水)～9月1日(日)  
入場者数:11,411名

主催:神田日勝記念美術館  
協賛:写真工房  
後援:鹿追町、鹿追町教育委員会、神田日勝記念美術館友の会、鹿追町文化連盟、  
北海道新聞帯広支社、十勝毎日新聞社、NHK帯広放送局、FM-JAGA、FM WING  
協力:帯広大谷高校放送局



浅井美紀《作品1(半身の馬)》  
2018年タイプCプリント 作家蔵



浅井美紀《作品7(飯場の風景)》  
2018年タイプCプリント 作家蔵

コラボレーション企画第1弾は、帯広市出身の写真家・浅井美紀(あさい・みき)とのコラボレーションによる写真展を開催しました。浅井は2012年から本格的な写真撮影を始め、SNSへの写真投稿がきっかけで海外メディアから注目を浴び、現在は国内外で人気を博する写真家として、全国の写真ギャラリーで個展や講演を行っています。彼女が撮影をはじめたきっかけは、自宅の庭で眼にした朝露の美しさに胸打たれた経験だったといますが、ひとしずくの水滴の中に花や風景を自在に閉じ込めてみせる浅井の写真様式は、独特の幻想的な世界観を持っています。

本展では、神田日勝と浅井美紀、絵画と写真のコラボレーションの試みとして、神田日勝の7点の油彩画、すなわち《馬(絶筆・未完)》、《飯場の風景》、《牛》、《画室C》、《自画像》、《室内風景》を浅井が撮り下ろし、それらの新作全12点を中心に展覧会を構成しました。

「しずく写真」の仕組みは、水滴を天然のレンズとして利用したアナログな手法によるもので、特殊な機材や道具、デジタル技術に頼ったものではありません。しかしながら、浅井が切り取った光景、すなわち、今にも花卉から零れ落ちそうな水滴に、日勝の絵があたかも閉じ込められているかのように反転して映り込むさまは、どこか神秘的で、静謐な空気をまといまわります。その水滴は儚く消える朝露、そこから生命の儚さをも連想させ、8月に50回忌を迎えた神田日勝の画業を偲ばせます。

本展では、コラボレーションの新作12点に加え、神田日勝の油彩画29点、浅井の旧作10点、計51点を前期後期に分けて展示しました。



撮影風景(2018年8月13日)



### 関連イベント

#### アーティスト・トーク

案内:浅井美紀  
(本展出品作家)  
日時:7月21日(日)  
14:00～14:30  
会場:展覧会場  
参加者:32名



#### しずく写真ワークショップ

日時:6月30日(日)  
①写真講座 14:00～14:40  
②ワークショップ 14:45～16:00  
会場:鹿追町民ホール2Fミーティング室  
受講無料(デジタル一眼レフカメラ、  
マクロレンズ、三脚を持参)  
参加者:27名(見学者含)



## 常設展

### 第1期常設展

### 「神田日勝—未完のキャンバス」

会期:2019年4月16日(火)～6月23日(日)  
入場者数:6,155名



# コラボレーション企画展

神田日勝×吉田傑ダンボール・アート

## 「飛び出す！ 半身の馬」

初めてのプレ・イベントとして、神田日勝の絵画と、ダンボール・アートによるコラボレーション企画展を開催しました

会期：2019年9月4日(水)～11月4日(月・祝)  
入場者数：18,689名

コラボレーション企画第2弾では、北海道内遠軽町出身の造形作家・吉田傑(よしだ・すぐる)のダンボール・アートとのコラボレーションを行いました。ダンボール・アートは、近年SNSをはじめ、公立美術館でも企画展が組まれ注目を集めています。近現代美術の流れに沿えば、ダンボールを立体作品の素材に取り入れることは1960年代からミニマル・アートの彫刻家たちによって試みられてきましたが、日本では、80年代の日比野克彦の仕事がその始まりに位置付けられるでしょう。最近では、吉田と同世代の若手作家がSNS等で各々作品を発表し、注目を集めています。

本コラボレーション企画の象徴的な試みとして、吉田は神田日勝の代表作《馬(絶筆・未完)》、通称「半身の馬」を、3次元の立体作品に生まれ変わらせることに取り組みました。吉田は日勝の造形を筆触と制作プロセスに探り、およそ4ヶ月をかけて制作された新作《半身の馬》では、働く馬の証として胴体に刻まれる「胴引き」痕や、原色絵具を使用した毛並の色彩が再現されるのみならず、日勝特有の制作プロセス(端からブロックごとに完成させていく)に倣い、胴体の途中で制作が止まったかのような様が呈示されました。

本展では、絵画の馬とダンボール・アートの馬との対峙(右図)をハイライト(見どころ)とし、日勝の油彩画23点と吉田の旧作12点を展示しました。

主催：神田日勝記念美術館展覧会事業実行委員会  
共催：神田日勝記念美術館、神田日勝記念美術館友の会  
後援：鹿追町、鹿追町教育委員会、鹿追町文化連盟、北海道新聞帯広支社、十勝毎日新聞社、NHK帯広放送局、FM-JAGA、FM WING  
協力：マウレメモリアルミュージアム(丸瀬布温泉マウレ山荘)、帯広大谷高校放送局



制作風景(2019年6月)

吉田傑ダンボール・アート作品集  
—New Eyes for Old Sights—  
発行：神田日勝記念美術館(2019年9月)  
全32頁 1,000円(税込)

### 第2期常設展

### 「神田日勝の隠れた名品I」

会期：2019年11月6日(水)～2020年4月5日(日)  
入場者数：3,940名(3月31日時点)

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、  
3月2日(月)～16日(月)まで臨時休館



俳優  
**吉沢 亮**

脚本家  
**大森 寿美男**

第27回 **馬耕忌**

会期:2019年8月25日(日)

鹿追町民ホール 入場者数:633名

主催:馬耕忌実行委員会  
共催:神田日勝記念美術館・神田日勝記念美術館友の会  
後援:鹿追町・鹿追町教育委員会・鹿追町文化連盟  
北海道新聞帯広支社・十勝毎日新聞社・NHK帯広放送局

撮影者/佐藤克秋

## プレミアムトークショー



限定600席の会場には、全国各地から  
3,484名のご応募をいただきました!

日勝50回忌にあたる今年度の馬耕忌は、2019年4月から9月に放送されたNHK連続テレビ小説第100作目『なつぞら』にまつわるプレミアム・トークショーを開催しました。戦後の十勝を舞台としたこのドラマに神田日勝をモチーフとした青年画家「山田天陽」が登場することから、山田天陽役の吉沢亮さん、脚本を手掛けた大森寿美男さん、そしてNHK統括プロデューサーの磯智明さんが参加し、ドラマの製作背景や撮影時のエピソード、そして日勝への想いを語っていただきました。

### NHK連続テレビ小説 『なつぞら』

連続テレビ小説第100作の記念作品。1937年(昭和12年)に東京に生まれ、戦争で両親を失い父の戦友に引き取られた戦災孤児の少女・奥原なつが、北海道・十勝で広大な大自然と開拓者精神溢れる強く優しい大人たちに囲まれてたくましく成長し、上京後北海道で育んだ想像力と根性を活かして当時「漫画映画」と称された草創期の日本アニメの世界でアニメーターを目指す姿を描く。



**吉沢 亮** よしざわりょう  
俳優

1994年東京生まれ。2011年俳優デビュー。主な出演作に、ドラマ『GIVER 復讐の贈与者』、映画『ママレード・ボーイ』、『銀魂』シリーズ、『キングダム』、2019年『リパース・エッジ』では第42回日本アカデミー賞新人俳優賞を受賞。連続テレビ小説『なつぞら』で主人公に絵心を教える青年『山田天陽』を好演し話題をよんでいる。2021年放送の大河ドラマ『青天を衝け』では、新一万円札の顔としても注目される渋沢栄一役で主演する。



**大森 寿美男** おおもり すみお  
脚本家

1967年神奈川県生まれ。1997年脚本家デビュー。『泥棒家族』『トトの世界〜最後の野生児〜』で第19回(2000年度)向田邦子賞受賞。代表作に大河ドラマ『風林火山』『64(ロクヨン)』大河ファンタジー『精霊の守り人』『フランケンシュタインの恋』など。監督と兼務で映画『風が強く吹いている』『アゲイン28年目の甲子園』を執筆。連続テレビ小説は『てるてる家族』(2003年度後期)に続き2作目となる『なつぞら』を執筆。



**磯 智明**  
いそともあき  
NHK  
統括プロデューサー

東京都出身。1990年日本放送協会入局。NHK名古屋放送局に配属。1994年日本放送協会制作局ドラマ番組部助監督。演出を経て、2005年からプロデューサー。2007年名古屋放送局制作部プロデューサーに異動。2010年日本放送協会制作局第2制作センタードラマ制作部チーフプロデューサー。文化庁芸術祭優秀賞、ギャラクシー賞、モンテカルロ・テレビ祭優秀賞、アジア太平洋放送連合賞等受賞。



**小林 潤**  
こばやし じゅん  
神田日勝記念美術館  
館長

1953年北海道鹿追町生まれ。1972年5月鹿追町役場奉職。町民政策課長、総務課長等を歴任、2011年1月に鹿追町教育委員会教育長に就任。2016年4月より現職。

**小林** 今日は皆さんがもっともっと『なつぞら』を好きになるように、そして神田日勝に興味を持ってもらえるよう、とっておきのお話を伺ってみたいと思っています。どうぞよろしく願いいたします。それでは最初に『なつぞら』への思いということで、制作統括の磯さんに話しをお伺いしたいと思います。今回は(NHK連続テレビ小説)100作目という大きな節目に、十勝を舞台にした『なつぞら』をやろうと思われたきっかけってなんでしょう。

**磯** 100作目ということで、今までと違ったようなイメージで始めると良いなあと考えておりました、北海道を舞台にしようと思っていました。札幌とか函館とか旭川は今までドラマの舞台になっていましたが、北海道の東側が舞台になることはなかった。そこで、戦後、北海道の開拓の歴史を含めて調べていくうちに、十勝の酪農だとかお菓子メーカーだとか非常に歴史が魅力的なところがあったので、そこを題材にしてみたら物語を作れるのではと思い、十勝を舞台にしようとしてリサーチを進め今に至ります。

**小林** 脚本を務められた大森さんはどんな思いを込められたのでしょうか？

**大森** 100作目ということだったので、依頼を受けた時に朝ドラの最初の一作目を作った人はどういう思いだったのかと考えました。そうしたら一作目を作った人は、まさか100作目を目指して作ったわけではなく、一作目を開拓することだけを考えて作ったんだろうな、一作一作の積み重ねがあって100作目に到達している。

では、最初の一滴を垂らす人の話をドラマでできないかと考えました。そこで開拓者というテーマが生まれて、開拓者と言えば北海道。で、もうひとつテレビドラマと同じように戦後文化として花開いていったアニメーションの世界。この二つを最初は別々に追いかけていたんですが、十勝という場所にきて、これは一つになるんじゃないかという考えを持ち、この企画を考えました。

**小林** それでは演じる側にお話をお聞きしたいと思います。このドラマで、なつの幼馴染で、なつの目標でもあり、心から応援しているのが吉沢さんの演じている山田天陽だと思うんですが、朝ドラのオーディションに受かって、山田天陽の役が決まった時はどんな気持ちだったんでしょうか。

**吉沢** 素直に嬉しかったですね。100作目ということもありましたし、今までも何度か朝ドラのオーディションを受けさせていただいていたんですけど、毎回落ちていたのでなんか朝ドラのオーディションで記念受験みたいなものであまり受かるつもりで挑んでいなかったんですが、まさかこのタイミングで山田天陽という物語の中で重要な役をいただけて、すごく素直に嬉しかったです。

**小林** 落ちてたんですね。どうして落としたのか、きっといろいろあるんでしょうね(笑)。天陽は神田日勝をモチーフにしているということで、実は吉沢さんはドラマの撮影が始まる前に、美術館にお忍びで来ていたんです。帽子を目深にかぶってマスクして、この辺では着ないような厚めの洋服で、地元の人から見るとどこから見てもお忍びで来ている

俳優っぽいぞって。もうバレバレでしたね。日勝の絵を見て、どう感じられましたか？

**吉沢** 恥ずかしいですね(笑)。そんな風に見られていたんですね。実際にここに来て絵を見させていただく前は、インターネットとかで調べたりすると、自画像だったり馬の絵だったり暗い色で描いている絵が印象的だったので、そういう部分から闇を抱えているのかなとか思っていたんですが、もちろんそういう絵もありつつ、いろんな色を使ったカラフルな絵があったり、ここに来て山田天陽の役作りに凄く役立ちましたし、絵から受けるインスピレーションで意外と情熱的な部分もあるんだと感じました。

**小林** 天陽はどんな人物だと受け止めてらっしゃいますか？

**吉沢** 僕は、すごく天陽は自分の感情より周りのことを見ていて、考えて行動して生きている人なんじゃないかなと。小さい頃貧しい生活で、兄が東京へ行って家族を自分が支えていかなければならないという思いもあって、自分の感情よりも周りがどう思うかを気にして生きている、でもそれは彼にとって苦ではなく、そういう人間なんだろうなと思って演じています。

**小林** 演じていて吉沢さん自身と重なるところはありますか。

**吉沢** 自分がこう言いたいというよりも、言った先の相手のリアクションや行動が気になって生きているところは、天陽に似ているかもしれません。

**小林** 絵を描くシーンが出てきましたが、実際の場面ではどのような状況でしたか？

**吉沢** ほぼ一発撮りのような感じでしたね。絵の見本を描いてくれる先生がいて、その先生が描いてくれた完成形を見て、なんとなく自分の中で描く線を頭の中に入れておいて、本番は一発でわーっと描く感じです。とにかく思いきりの良さを意識して、絵を描いてる人っぽく見せなくてはいけないので、上手いどうこうではなく、何の躊躇も無くそこに向かっていくことを意識しましたね。

**小林** なかなか絵を一発で描くというのは難しい。神田日勝も自分で見たものを自分の頭の中に落とし込んで、デフォルメして、それをキャンバスに落とし込むようにして描いていたので、今おっしゃっていた描き方や度胸があるところなどが似ているように思えます。ところでシーンの中では搾乳のシーンがありましたが、相手が生き物ですから大変じゃなかったですか。

**吉沢** 大変でしたね。懐かしいですね。去年の6月のロケでまとめて撮影していたんですけど、怖いんですね。牛の下に入らなければならないので。絞る力加減なども練習をしました。

**小林** 生き物と接するのは大変なことですよ。

**吉沢** 大変ですよ。馬とかも日によっては素直に言うことを聞いてくれることもあるし、全然言うことを聞いてくれないこともあるし、慣れてくると可愛いですけど、最初の頃は怖かったですよね。

**小林** 馬といえば、最初の頃になつと二人で馬に乗って草原を悠々と走るシーンがありましたよね。

**吉沢** 僕に乗っていた馬は、もともとレースをやっていた足が速い馬だったので、「並足」だけでも十分速かったので「駆け足」までしなくていいと聞いていたんですが、いきなり本番で監督に「駆け足」でやってみようって言われて…。そしたらものすごく速くて、あぶみから両足がスポンと抜けて、もう死ぬかと思いました。そこからは、ずっと太ももの筋肉をキツとやって(力を入れて)、必死に馬に乗っていました。それでも一発オッケーだったのでよかったんですけど。

**小林** 磯さんに伺います。天陽を吉沢さんに演じてもらうことにした決め手は、どこなんですか。

**磯** 天陽の台詞には深いところ、哲学的なところがあって、そしてヒロインなっちゃんを励ます、勇気を与える存在。温かいところとクールなところの二面性のある人物で、番組のテーマっぽいことを言う人物でもある。見ている人に印象に残る方がよいなど。オーディションをする中で、天陽というキャラクターを一番近い形で演じていただけるのは吉沢さんかなと。

**小林** 大森さんにお聞きしたいと思います。吉沢さんの演技をどう見えていますか。





撮影者／佐藤克秋

**磯** 最初は天陽のイメージにしたらかっこよすぎるかなと思いましたが、吉沢さんはこういう飾らない人間なので、芝居も表面的に飾った芝居をしないで自分の実感したことだけを表現する芝居をする方。神田日勝さんも飾った芸術を嫌うようなタイプの画家さんだったので、そういうところも重なるなど。あとは皆さんが観ていただいているとお期待通りの活躍をしてくれています。

**吉沢** ありがとうございます。嬉しいですね。

**小林** そういえば、北海道弁は難しくなかったですか？

**吉沢** 難しいですね、微妙なニュアンスが逆に難しかった。お父さん役の北海道出身の戸次さんにも教えてもらいました。

**小林** 大森さんは神田日勝に対して大変な思い入れがあるとお聞きしています。どんな出会いだったのでしょうか。

**大森** 23歳くらいの時に古本屋でたまたま手に取った美術書の中に、神田日勝のことが書いてあり、そこで初めて知りました。その中に《室内風景》があり、衝撃を受けたんですね。その当時僕ははととても貧乏をしながら小さな劇場で芝居をつくっていて、将来に不安を抱えていたんです。この絵を見たときに、とても閉塞的な空間にいて吉沢くんが言っていた闇を抱えてそうな屈折した男のようにも見えるんですが、何か僕にはととても自由で何かに開放されている人のように思えた。その何かとは人間の欲望ではないかと思った。成功したい、いい生活をしたい、社会に認められたいと考えて創作しても幸せではないなと感じた。元々は成功するために「もの」を創るのではなく、自分の中に何か表現をしたいという欲求があって始めたはず。でもそういった欲望を捨てるのは難しい。ではどうすればいいか。自分だけの価値観を持ち、その中で自分の創作をみつけていかなければいけない。ということはこの絵から教えてもらって以来、神田日勝が憧れの存在なんです。

**小林** 《室内風景》にインスピレーションを受けて、芝居をつくったという話がありますが。

**大森** 僕にはこれが自分の理想の舞台に思えて、立体的に《室内風景》を再現するような舞台装置を作りました。芝居の内容は全く関係なかったですが。

**小林** 神田日勝に揺るぎない価値観を感じ、それほどまでに憧れたということですね。古本屋で買われた本にはどのような事が書かれていたんですか。

**大森** 神田日勝さんはととても素敵な言葉をたくさん残していて、その一文を紹介させていただきたいと思います。「私の人生観～見極めたい物

の本質」と題する一文です「八百屋のキャベツは時として値段が二倍にも三倍にも変わる。一個のキャベツの実質的内容、本質的価値は周囲の諸現象の、何を問わず変わらない。だが…世俗的価値観は値段の昇降という現象によって、高級品にもなれば下等物にもなってしまうのだ。これに類似した価値判断が社会には無数に氾濫していて、どれ程人間を傷つけ人間を歪めていることか。何が本質で何が現象かと言うことの考察を忘れると偽り者が通用してしまうのだ」この言葉に痺れてすごく共感したんですね。彼の生き方、作品の魅力が、如実にこの文に表れているのではないかと思います。

**小林** 神田日勝は中学校までしかでていないんですが、描く絵に、書いている文章に本当に深みがある。神田日勝との出会いが、その後の大森さんの作品や人生に相当大きな影響を与えているんでしょうかね。

**大森** そうですね、僕も吉沢君も集団で「もの」をつくっているのですが、なかなか自分だけの価値観だけで物事を推し進めるのは難しいところがありますし、世間の評判とか現象に流されることがや振り回されることもあるが、そんな中でもやっぱり自分だけの価値観を持っていないと創作とか表現は長く続けられないと、神田日勝という存在を戒めのように感じながら生きています。

**小林** それで、『なつぞら』に神田日勝の要素を盛り込んだということでしょうか。

**大森** 偶然なんです。十勝を舞台にしようと思って十勝に来たら、そこが神田日勝の生きた場所だったことに気が付き、それでこの物語には神田日勝を出したいという思いがあつて。神田日勝さんのことを調べるとこれから描こうとしているヒロインと境遇が似ていて、子どもの頃に東京の空襲から逃れて北海道に疎開し開拓民としてやってきた青年。そこで独学で絵を見出し出していく。ゆくゆくはアニメーターになっていく女の子の話を考えていたので、これは運命的な出会いを果たすのではないかと、それで天陽という人物を創作しました。

**小林** 大森さんが日勝にそんなに強い思いを持っていて、天陽を登場させたという話に驚き、感動しています。磯さんは大森さんの思いをどう見ていたのでしょうか。

**磯** 元々十勝とアニメーションの話は別々の企画で動いていた時に、大森さんが神田日勝という画家を切り口にするのと、この二つが繋がるんじゃないかとおっしゃって、初めてなつぞらという企画が固まったので、神田日勝の存在がなければ『なつぞら』は無かったんじゃないかと思っています。

**小林** こんなに強い思いが込められた役だったということで、吉沢さんは改めてどう思われましたか。

**吉沢** いやあ、まさかそんな熱い思いが…。クランクアップする前に聞きたかった。

**大森** 全部台本に込めました。

**吉沢** 天陽の台詞が本当に素敵で、詩的で綺麗な言葉。天陽の台詞の中に神田日勝自身の言葉があったりとか、大森さんが天陽のキャラに愛情を注いで下さっているんだなと感じていました。

**小林** それではここで場面を変えて、天陽の魅力についてお聞きしたいと思います。天陽のシーンで、やはり印象的で大いに盛り上がったのは、なつとの恋模様だったと思います。なつへの接し方がとても不器用だけど、誠実に感じる。十勝に残ってほしいの？東京に送り出してやりたいの？どっちなの？って、とてもじれったい思いで観ていた方も多いと思いますが、その辺をお聞かせください。

**吉沢** なつちゃんに対しては小さいころに助けてもらったこともあるし、「なつちゃんのことが好きだ」という気持ちと「東京に送り出したい」どちらも本当の気持ちであるんだけど、結局自分がどうしたら良いか揺れている部分があって、すごく人間ばいになって、天陽かわいいなって僕は思っただけでした。

**小林** 結局、なつは東京でアニメーターになることを選ぶ。そう告げられたアトリエでのシーンは、日本中がとても切ない気分になったと思うんですけど、天陽はどう思っていたのでしょうか。

**吉沢** 切ないですよ、天陽めちゃうくちゃなつちゃんに振り回されていますからね。「東京行く」って言って背中押そうとしたら、「そんな応援しないでよ」っとか言われて、じゃあどうすればいいんだよって。そしたら「おじいちゃんに良いって言われた」って抱きつかれて、そんな中、優しくほえんでゆっくりと背中を押した天陽は男前だなんて思いました。

**小林** NHKの「あさイチ」に出演されたとき、中学時代はモテ期で、なんと学年の3分の1の女子から告白されたと話していましたが、片思いの切なさ、これでわかりましたか！（笑）

**吉沢** いや、僕も結構片思いした時期ありました。小学校3年ぐらいから高校2年までずっと好きな子がいて、小6のときに僕の親友と付き合いだして好きだと思いつつも言えない時期がありました。

**小林** にわかには信じられませんか？…（笑）。磯さん、二人の恋模様のシーンには、どんな思いが込められていたんでしょうか。

**磯** 結局なつが東京に行けば、別れを意味するところがありますが、なっちゃんが天陽を見ていないときに天陽がなつに向けている表情が非常に切ない。なっちゃんと目が合うと、また違った表情をみせる。表情の移り変わりが自然でいい芝居をするなあ。

**小林** なつとの恋模様のシーンも含めてですが、天陽にはとても印象的な言葉が多い。天陽は寡黙で、セリフの数は多くはないが、話をしていない時も吉沢さんがいるだけでそのシーンに緊張感が出るし、観る側はずっと「今度はどんないいことを言ってくれるんだろう」と期待して観てしまう。その印象的な天陽のセリフ、いくつか紹介してもらいましょう。（ナレーション）

——十勝にやって来たものの、開墾がうまくいかず悔しい思いをしていた天陽に、なつが「天陽くんは、農業をやりたいの？」と聞いた時の天陽の言葉です。「そりゃ、やりたいよ！俺は、ここで生きたいんだ！ここが好きなんだ。この土に、勝ちたいよ！勝ちたい！くそ！くそ！くそ！」

**小林** この台詞は神田日勝の価値観そのものといった感じがしますよね。——アニメーションを作るために東京に行きたいという本心を言い出さなくて悩んでいるなつに対して、天陽がなつに掛けた言葉です。「元々人間の生き方に、良いも悪いも無いんだよ。それは人間がこしらえた観念にすぎないのさ。なっちゃんも自然になればいいだけだよ。自分がどう生きたいのか、どうしたいのか、自然な気持ちに従えばいいだけだ。」

**小林** 人はなぜ生きるのか、どう生きるのか哲学的な台詞になっている。——先ほどの話にも出た吉沢さんも大好きなシーン。上京を決めたなつにエールを送る天陽のセリフです。「なっちゃん…俺にとっての広い世界は、ベニヤ板だ。そこが俺のキャンパスだ。何も無いキャンパスは広すぎて、そこに向かっていくと、自分の無力ばかり感じる。けど、そこに生きる自分の価値は、ほかのどんな価値にも流されない。なっちゃんも道に迷ったときは、自分のキャンパスだけに向かえばいい。そしたら、どこにいたって俺となっちゃんは、何も無い広いキャンパスの中でつながってられる」

**小林** これも深い言葉。吉沢さんはどんなセリフが印象に残っていますか。  
**吉沢** そうですね、今のなつを送り出す台詞に、僕はある意味なつへの自分の気持ちの告白だと思っているので、僕も思い入れがありましたし、天陽の送り出した気持ちとなっちゃんのことが好きだと言う気持ち二つの覚悟があった台詞で僕は好きでした。

**小林** それでは『なつぞら』を応援しようということで、北海道の十勝総合振興局の女性職員の皆さんが「なっちゃん隊」という応援団を結成して、PR活動してくれています。そのなっちゃん隊の皆さんに、天陽のどんなセリフが印象に残っているかアンケートをとりました。その中からいくつかをご紹介します。

——雪次郎が役者を諦め十勝に帰った時に天陽が掛けたセリフです。「競争じゃないべさ、生きるのは」。ともに子ども時代を過ごしたなつや雪次郎の上京を見送り、十勝に残って農業と絵を続けながら生きている

天陽ならではの印象的で共感する台詞でした。

**吉沢** そのシーンは本当に印象的に心に残っています。実は雪次郎と天陽の友情ってそこまで描かれて無く、二人だけのシーンも初めてでした。雪次郎役の山田裕貴くんとはプライベートでも仲が良く、友達としても役者としても信用している方なので、すごくお互いの空気感とか気持ち良くはまっていて、そのなかでのあの台詞だったので自分でも気持ち良く言えて、あそこのシーンはすごく良いシーンになったのではないかと勝手に思っています。

——続いて高校の演劇の稽古で、なつに「お前のセリフには魂が見えないんだ！」と言った倉田先生に対する言葉です。

「魂なんてどこに見えるんですか？魂なんて作れませんよ」。「気持ちを作れとか魂を見せろと言われても分からないと言っているんです。なっちゃんのままではだめなんですか？他の魂を作らなきゃだめなんですか？」。この台詞で流れが変わり、とても印象に残っています。このシーンに込めた思いや演じてみての思いをお聞かせください。

**小林** 吉沢さん、このセリフはどんな気持ちで演じていたのでしょうか。  
**吉沢** 僕、本当に大森さんのことをすごいなって思ったんですけど、役者をやっていると思うことがそのまま書かれていて、話し方を変えたり表情を作ってみたりしてキャラになることはできるんですが、そこに血を通わせ、命を落とし込むとなると自分の感情を動かさなければいけないから、なっちゃんは台本に書かれている台詞を上手く言おうとしているだけ。人が見ている心を動かさず芝居に昇華して行くには自分の心が動かないといけないし、「天陽すげえな」って（笑）。

**小林** 天陽の数々のセリフについて磯さんは制作者としてはどう見ていましたか。

**磯** 天陽というキャラクターは物語全体に血を通わせるような、魂という言葉で大森さんが好きでよく打ち合わせて使う言葉なんですけど、この物語のテーマは天陽が背負っている気がするし、物語を大きく動かしているのは（中川）大志さん（坂場一久役）だと思うし、この二人の男の人間像が大きなエンジンとなっている。そのコアの一つが天陽だと思う。

**小林** 素敵なお言葉が沢山出てくるんですが、こうしたセリフは、大森さんの日勝への思いが相当込められているのでしょうか。

**大森** 神田日勝から自分が受けた影響を、そのまま素直に生き方に転化しているような感じ。だからといって、天陽が生きている言葉なんで、神田日勝でも無いし、私でも無いし、あくまで吉沢亮という存在を通した吉沢くんが命を与えてくれた天陽の言葉として創作しているので、もはや天陽の言葉だと思っている。

**小林** こうしたセリフから、どういうことを感じ取ってほしかったんでしょうか。

**大森** 天陽はとても自然体で、自分の理想を静かに追い求めているような、ちょっと達観したような人物にも思えるけど、その裏には、子どもの頃から土に勝ちたいという産声から始まって、すごい葛藤して自分の生き方を見つけてきた人。天陽が一番開拓してきたのは自分の価値観で、その中で言葉を紡いでなっちゃんに語り掛けている。その言葉の裏には相当な葛藤があることを感じてもらえればいいな。

**小林** こまで、『なつぞら』と神田日勝の魅力についてとっておきのお話をお聞きしてきました。楽しんでいただけたでしょうか。非常にお忙しい中駆けつけて、貴重なお話をしていただいた、吉沢さん、大森さん、磯さんに改めて盛大な拍手を。今日はどうもありがとうございました。





# なつぞら★レポート

レポーター 浅野 貴(当館係長)

今年度はまさに『なつぞら』抜きには語れない年となりました。入館者は前年度の1月からじわじわと増えていき、ドラマの放送が始まった4月にはすでに例年とは桁違い。放送の終わる9月まで毎月、前月の入館者を超えていき、ピークとなった9月は前年比約9倍。2月末時点で4万人に達し、前年度比約5倍の見通しとなっています。



馬耕忌プレミアムトークショー後  
会場の皆さんと記念撮影

またぜひ来館ください。  
お待ちしております

## なつぞら出演者が続々と来館！

鹿追町の近隣市町村でドラマロケが行われました。残念ながら本町では行われませんでした。当館には『なつぞら』出演者の方々がお越しくださいました。



## 鑑入館者数55万人達成！

年度当初の予想では、2020年2月に開館以来の入館者数55万人達成を見込んでいましたが、『なつぞら』の効果が大幅に8カ月も前倒しとなりました。

←松本新吾副町長から記念品を受け取る富永夫妻  
(2019年6月29日撮影)



## なつぞらパネル展示

馬耕忌にあわせて、当館ロビーでなつぞらパネル展を開催しました。ストーリーや出演者の役柄、撮影時のオフショットなど、十勝編を中心に全6枚のパネルを展示しました。

## なつぞら公式グッズコーナー

私も愛用しているマグカップのほか、雪月の包装紙ランチョンマットなど、公式グッズを販売しています。来館の記念にぜひどうぞ。



## みんなでつくる！ 『FFJの歌』に参加！



皆さんご存知ですか。「FFJの歌」。日本学校農業クラブ連盟の公式ソングであり、主人公「なつ」が通う十勝農業高校の生徒誰もが歌える、全国の農業高校生の魂を揺さぶる歌なのです。NHK札幌放送局で募集した「みんなでつくる！『FFJの歌』」に当館も果敢に応募。多数の応募から2パターンの動画が制作される中、当館は見事「その1」の1番のサビを飾り全国で放送されました！

★なつに絵心を教える幼なじみ「山田天陽」役、吉沢亮さん。吉沢さんは、ロケが始まる前の役作り、NHKステラの取材、馬耕忌と計3回ご来館いただきました。

★柴田牧場で働く「戸村菊介」役、音尾琢真さんは『なつぞら』の特別番組の収録でご来館いただきました。日勝の作品を前に、神田ミサ子さんからエピソードを聞き、目を潤ませる場面も。

★人里離れた森の奥で暮らす「阿川弥市郎」役の、中原丈雄さん。ドラマの中の強面な雰囲気とは対照的に、とても気さくに應對される優しい方でした。

## 感想ノートより

しゅやくの馬のえがげいじゅつてきで、とてもすてきでした。わたしには、あんなにすてきなえは、かけません。わたしもえをかくのがすきだけど、あんなにすてきなえは、かけません。わたしは馬をかくときにはあの「馬」をさんこうにします。

2019年5月1日 萌々香(9才)

以前より神田日勝という人、作品は知っていましたが、実物を目にしたのは初めてでした。近隣に住んでいながらこんなにも素晴らしい人がいたにも関わらず、これまで足を運ばなかったこと悔しくて仕方ありません。

写実的ではなく、又画風もせわしく変化し、様々な顔の作品があつて、おそろしく摘み所のない方、しかしその裏には力強さを感じました。

生命力、これが彼を表す一言でしょうか。

いえ、彼の作品、言葉には畏怖を感じます。

2019年5月2日 彩花

絵がとても上手で、そしてとてもきれいでした。でも32才でなくなってしまって、日勝さんもその絵を書いていた馬もとてもかわいそうでした。

日勝さんの絵は日勝さんの気持ちをえがいたんだなと思いました。

2019年8月7日 栃木県下野市 緑小4年

命がこもった絵でした。生活がこもった絵でした。すばらしい。ありがとうございます。

2019年8月7日 札幌

私も絵を描いています。自然のあり方を描く日々をおくれる幸せを感じています。

日勝さんの生き方そのものが絵に表現されていることに感動しました。短い生涯を強く生きたかんじがしました。来てよかったです。

2019年8月8日 埼玉県 kazumi

ずーっと気になっていて、昨日日経日曜版で取り上げられ、又々いつ行けるかと考える日々…。以後展示される(九州に近い所)機会があるのか問い合わせ、来年東京ステーションギャラリーに行くとの事。来年迄待ちたくないとの思いで来館しました。今回の目的は、岩内の木田金次郎美術館とこちら。昨日、木田の未完成「バラ」を見て、今、神田日勝の未完成「馬」にやっと出会う事が出来ました。どちらも生き方が凄いい!! 日勝の生き様を思うようにやわらかい緑と木々の揺れ、青空に白雲…夏の終わりの旅に最高でした。

2019年9月1日 佐賀県伊万里市 出雲

私は85才まで何をしていたのだろうか? 人生に対する大きな疑問である。ここへ来てその疑問が解けた様な気がする。どこまでも続く平野、十勝の人々は心の大きさを持ち合わせている。来て良かった、良かった。もやもやが晴れ、これから100に向い前向きなれた。秋日濃し 豆畑に続く 豆畑

2019年10月3日 一灯

## 第25回 蕪壑祭

2019年6月17日(月)

神田日勝記念美術館・鹿追町民ホール／参加人数：201名

今回は例年と趣向を変えた、第1部は1995年結成というアンサンブルで十勝管内を中心に広く札幌・釧路・岩見沢・美唄など道内各地で活動しているGrazie' 95 (グラッチェ 95) を招いての演奏会でした。映画音楽『アナと雪の女王』をはじめ、クラシック・ポップス・オカリナのオリジナル曲など多彩な演奏に満席の会場から「アンコール！」の声が多数かかりました。

第2部は町民ホールに移動しての交流会。友の会役員総出で地元の食材を使ったメニューやワインは今年も大好評でした。



## 第17回 日勝祭

2019年12月8日(日)

鹿追町民ホール・神田日勝記念美術館

参加人数：29名

日勝の生誕祭として開催している日勝祭ですが、今回は前NHK帯広放送局長山本健一氏をお招きしました。入社後最初の赴任地が帯広で退職時の勤務地も帯広であった同氏は、当館の熱心な応援者です。この度の日勝祭でも国内の先進事例をご紹介いただき、今後の運営への示唆に富んだお話が展開され、出席者の共感をよんでいました。

美術館ロビーに会場を移した交流会では、講演の余韻とともに日勝ファンの互いの思いが熱く語られていました。



## 芸術鑑賞バスツアー

2019年7月20日(土) 参加人数：36名

札幌市・北海道立近代美術館「東山魁夷 唐招提寺御影堂障壁画展」

美術館のイベントでも特に人気の高いバスツアーは、今年も受付開始当日早々に募集を締め切る状況でした。同展閉幕間際の入館だったこともあり、大勢の入館者で溢れる会場を、流れに逆らいながらの鑑賞でしたが、参加した皆さんから充実の感想をいただきました。



## アート・キッズ・クラブ

- ①3Dアートに挑戦しよう！ ●2019年5月11日(土) ●鹿追町民ホール 参加人数：27名
- ②コマを作ってあそぼう！ ●2019年7月6日(土) ●鹿追町民ホール 参加人数：21名
- ③スノードームを作ろう！ ●2019年12月21日(土) ●鹿追町民ホール 参加人数：23名
- ④オリジナル文房具を作ろう ●2020年2月15日(土) ●鹿追町民ホール 参加人数：29名

計4回のプログラムを実施しました。事業を通して子どもたちに創意工夫する喜びや楽しさを感じてもらうことを目的としています。



## 子どもワークショップ

夏

### 子ども芸術鑑賞ツアー & 夏休み子どもワークショップ



2019年8月1日(木)

明治なるほどファクトリー十勝／北海道立帯広美術館

参加人数：30名

今年は明治なるほどファクトリー十勝で工場見学、北海道立帯広美術館で「チームラボ 学ぶ！未来の遊園地と花と共に、生きる動物たち」を鑑賞しました。明治なるほどファクトリーではチーズの色々な知識やチーズが出来るまでの過程を詳しく見学することが出来ました。

北海道立帯広美術館で開催されていたチームラボ展は、観るだけでなく自分の描いた絵が作品の一部に加わったり、身体を動かして体験出来る企画展として全国的に話題となっています。また、ワークショップ「缶バッジファクトリー」にも参加し、同展の「お絵かき水族館」で描いた絵をもとにオリジナルの缶バッジを制作しました。



冬

### 冬休み子どもワークショップ 「ねずみのペーパーウェイトを作ろう！」



2020年1月10日(金)

鹿追町民ホール 参加人数：20名

講師／三上 慶耀 氏(日本工芸会)

今年の干支「子(ね)」にちなみ、ねずみをモチーフに鹿追焼きのペーパーウェイト作り挑戦しました。ペーパーウェイトはモチーフと土台を組み合わせ制作します。

土台となる粘土をのし棒を使って楕円型に丸めた後、ねずみの丸みを形成するために、小さな粘土をちぎる・丸める・伸ばす・くっつけるといった細かな手指の動きを駆使してモチーフを作りました。



## 新グッズ紹介

オリジナルグッズが増えました！



◆クリアファイル 250円(税込)



◆キーホルダー  
大800円・小550円(税込)

◆ミニキャンバス  
950円(税込)



◆トートバッグ  
各1,500円(税込)

\*2020年4月より販売予定  
(デザインが変更になる場合がございます)

## 絵画修復



神田日勝展での作品の長距離輸送に先立ち、2019年秋に神田日勝《人間A》、《人間B》の修復を行いました。2点とも1969年に制作された150号の大型の油彩画で、厚塗りの絵具に所々剥離が生じていることから、展示や移動が困難な状況が続いていました。

今回の修復では、修復家の森直義氏(森絵画修復工房)により、絵具の剥離止めや、支持体であるベニヤ板の強化、さらに赤外線・紫外線による撮影調査がおこなわれました。長年《人間B》の下層に別の絵(失われた作品《集う》)が描かれているとされてきましたが、今回の調査結果から、その可能性が極めて低いということがわかりました。修復後の作品は、東京、鹿追、札幌の全会場でご覧いただけます。

## 神田日勝展のご案内

### 没後50年記念回顧展「神田日勝 大地への筆触」

神田日勝の没後50年を記念する回顧展「神田日勝 大地への筆触」が4/18から東京ステーションギャラリーで開催されます。

※新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、各会場の開催日時が変更する場合がございます。

本展は約40年ぶりの本格的な回顧展として、神田日勝の代表作を網羅しつつ、さらに最新の研究成果による新たな視点も加えて、神田日勝芸術の全貌をご紹介します。東京ステーションギャラリー(4/18～6/28\*)での開催後、神田日勝記念美術館(会期7/11～9/6)、そして札幌の北海道立近代美術館(会期9/19～11/8\*)へと巡回します。会期中は展覧会図録やオリジナルグッズも発売されますので、ぜひ会場へお運びください。

各会場の休館情報や観覧料は下記の展覧会公式サイトにてご確認ください。

公式サイト <http://kandanissho2020.jp/>

\*当館はこの間も開館いたしますが、東京・札幌への作品貸出のため、主要作品のほとんどはご覧いただけません。ご理解のほどお願い申し上げます。



展覧会図録、グッズ(イメージ)



## 音 / 声 / ガ / イ / ド /



ナビゲーターをつとめるのは、俳優の吉沢亮さんです。吉沢さんは2019年にNHKで放送された連続テレビ小説『なつぞら』で、神田日勝をモチーフにした青年画家「山田天陽」を演じ話題となりました。吉沢さんご本人は、2018年の『なつぞら』クランクイン前から、当館を計3回訪れ、日勝の絵にふれています。東京赤坂のスタジオで行われたこの収録時にも、スタジオのモニターに映るひとつひとつの作品に寄り添いながら音声を吹き込んでいただきました。

吉沢亮さんの語りとともに  
神田日勝作品のご鑑賞をどうぞお楽しみください

## 臨時休館の おしらせ

作品の貸し出しに伴い、大規模な館内修繕や全館に係る展示替えなどで、通常の休館とは別に臨時休館が多くなっております。ご来館の際はホームページなどで休館日や展覧会情報をあらかじめご確認くださいませようをお願い致します。

公式サイト <http://kandanissho.com>

